

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K01779

研究課題名(和文)ピアサポートを活用した、自閉スペクトラム症学生のストレスマネジメントに関する研究

研究課題名(英文) Study on stress management of students with Autism Spectrum Disorder utilizing peer support

研究代表者

早坂 浩志 (Hayasaka, Hiroshi)

岩手大学・教育推進機構・准教授

研究者番号：00261553

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、自閉スペクトラム症(ASD)学生の大学生活のストレスマネジメントにおけるピア・サポートの効果の検証を行った。(1)2930名を対象にした質問紙調査の結果、ASDの傾向がある学生は、人間関係の困難のみならず、成績不振等の修学上の困難に直面したり、将来の就職に関して不安を抱いている傾向が見出された。(2)障害学生の居場所スペースでの大学院生による継続的なピア・サポートは、ASD等の発達障害学生のコミュニケーションを促進することが示唆された。(3)ピア・サポートによる発達障害学生への個別学習支援は、学生の修学上の困難の低減だけではなく、相談スキルの向上に効果があることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

障害者差別解消法が施行され、大学教育においても発達障害とくに自閉スペクトラム症学生の心理・修学・就労支援が大きな課題になっている。本研究は自閉スペクトラム症学生の大学生活ストレスを明らかにし、そのマネジメントに同じ学生同士のサポートであるピア・サポートが果たす役割について明らかにした。

研究成果の概要(英文)： This study examined the effect of peer support on stress management of students with Autism Spectrum Disorder (ASD) in terms of their university life. (1) The results from the questionnaire survey targeted at 2930 students showed that students with ASD tendencies are likely to face not only difficulties in interpersonal relationships but also learning difficulties such as poor grades and feel more concerned about finding a job after graduation. (2) They suggested that the continuous peer support by graduate students in the community space of the Office for Students with Disabilities for those with developmental disabilities such as ASD promotes communication among them. (3) They indicated that the individual learning support for students with developmental disabilities through peer support is effective for not only reducing their learning difficulties but also improving their communication skills.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自閉スペクトラム症学生 大学生活ストレス ピア・サポート

1. 研究開始当初の背景

近年の大学において、自閉スペクトラム症の学生の修学・就労支援および適応障害等の二次障害防止が大きな課題になっている(日本学生支援機構、2019)。研究代表者・分担者は、ストレスマネジメントの立場から、過去の間人関係のトラウマティックなストレス、現在の大学生活のストレス、そして将来の就労のストレスの適切な処理における、ピアサポートの効果を検証する。

2. 研究の目的

(1) 自閉スペクトラム症(以下 ASD とする)の診断がある学生や、診断の有無や特性の程度に関わらず自閉スペクトラムの傾向を有する(以下 AS 傾向とする)学生が大学生活でどのようなストレスを感じ、どのような支援が必要なのかを明らかにする。

(2) ASD 学生を含む発達障害学生の間人関係のストレスマネジメントに居場所支援のピア・サポートが果たす役割について検討する。

(3) ASD 学生を含む発達障害学生の修学のストレスマネジメントに学習支援のピア・サポートが果たす役割について検討する。

3. 研究の方法

(1) 平成 23 年から平成 29 年 5 月までの、大学に支援申請があり認定された発達障害学生(以下支援対象学生とする)29 名(ASD:25 名・ADHD:4 名)を対象として、支援申請時の「修学等で困っている点」と「希望する支援」のチェックリストの回答および、関わった支援者(コーディネーター1 名・カウンセラー2 名)の評価に基づいて、彼らを感じた悩みと実施した支援の分析を行った。

平成 30 年 4 月の学生定期健康診断時に質問紙調査を実施した。1 年生と留学生を除く全受診学生に回答を求め、最終的に 2930 名が分析の対象となった。質問紙は次の 3 つから成っていた。1. ASD 関連困り感尺度(高橋ら、2017): 自閉的困り感尺度(8 項目)と对人的困り感尺度(5 項目)の下位尺度から成る。2. 学業と就職に関する悩みや不安: 早坂ら(2018)で見いだされた、学業に関する悩み(4 項目)と進路・就職に関する不安(3 項目)から成る。3. 学業と人間関係に関する悩みへの対処: 「勉強のことで困った時にどうしていますか?」という問いに 8 つの選択肢から複数回答可で選択する。同様に「人間関係のことで困った時にどうしていますか?」という問いにも選択回答する。

(2) 支援対象学生が自由に休憩・勉強する 30 m²ほどのスペースに、支援対象学生のコミュニケーションを促進する目的で、臨床心理学を専攻する大学院生を有償ピア・サポーターとして配置した。サポーター院生は、女性 5 名、男性 1 名であった。サポーターは平成 29 年 7 月から平成 30 年 2 月まで、授業期間中、各自週 1 回、60 分~120 分程度、シフト制でスペースにいるようにした。サポートが終了した平成 30 年 3 月、スペースをよく利用していた発達障害学生 7 名とサポーター 6 名と個別面談し、以下の項目について半構造的に聞き取りを行った。

(3) 発達障害学生の学習面でのストレス低減を目的に、支援室スペースでの有償のピア・サポート学生による個別学習支援を実施した。対象は学習支援を希望する支援対象学生で、支援室職員が必要であると判断した学生だった。平成 24 年度から 30 年度までのべ 30 名の発達・精神障害学生が対象になった。サポーター学生は支援対象学生の希望科目に応じて、学内ネットワーク、ポスター掲示、支援室職員による個別依頼によって募集した。平成 24 年度から 30 年度までのべ 39 名の学生がサポーターになった。学習支援は支援室スペースにおいて、原則として週 1 回 90 分実施した。支援内容はおもに専門科目の予習・復習と試験対策を行った。

4. 研究成果

(1) 29 名の発達障害学生の修学面の問題で多かったのは、「授業がわからない」(69%)、「授業への集中力が続かない」(55.2%)、「提出物の期限が守れない」(51.7%)で、人間関係の問題は 58.6%の学生が直面していて、「友人ができない」、「人とうまく関われない」、「自分の意見や気持ちをうまく話せない」の順で多かった。性格・行動面では 55.2%の学生が悩んでいて、「すぐパニックになる」、「興味のあることだけに没頭してしまう」、「大学に行けない」の順で多かった。進路・就職の問題は 55.2%の学生で、「就職できるのか心配」、「就活の仕方がわからない」、「就職後の人間関係が心配」の順で多かった。これまでの支援経験に基づいて、ASD 学生の「授業がわからない」等の修学面のストレスには個別学習支援が有効であり、人間関係のストレスでは同年輩者との関係に苦手意識をもつ学生が多かったことから、同年輩者と関わる機会の提供を充実させる必要があると考えられた。また、こうした大学が用意する様々な支援を ASD 学生が利用しやすいように提供することも必要である。

ASDに関連する困り感をもつ学生、つまりAS傾向が推測される学生は、そうでない学生に比較して人間関係の困難のみならず、成績不振等の学業上の困難に直面したり、将来の就職に関して不安を抱いている傾向が見出された。また、AS傾向がある学生は勉強で困った時の対処として、「友人に聞く」よりも「ネットや本で調べる」、「とくに何もしない」傾向があり、人間関係で困った時の対処としては、「友人に聞く」よりも「大学の相談窓口に相談する」、「ネットや本で解決策を調べる」、「SNSで相談する」傾向が見出された。これらの結果から、AS傾向がある学生の学業困難の背景には、同級生に相談できず、勉強で困っても何もできないことがあることがうかがわれた。しかし一方で、ネットや本の利用には親和性があり、それに加え人間関係の悩みへの対処では大学の相談窓口がリソースになりうることが示された。したがって、困難を抱えたAS傾向がある学生をネットを活用して大学の相談窓口につなぎ、そこから、学業、人間関係、性格・行動、そして進路・就職のそれぞれの専門スタッフが彼らの悩みの解消を目指したコミュニケーションを展開する仕組みを整備することで、大学が彼らの心理・社会的成長の場として機能するのではないかと考えられる。

(2) 7名の支援対象学生からの聞き取りでは、5名の学生がサポーター院生と「話した」と回答し、話す内容は6名が「大学生活、世間話」で、「趣味・遊び」3名、「勉強」3名、「愚痴」2名であった(複数回答)。そして「サポーターは今後も必要か」という問いに、6名が「今後もサポーターはいた方がよい」と答えた。今後いてほしいサポーター像は、「親しみやすい人」が5名、「勉強を教えてくれる人」4名、「年上の人」2名という回答だった(複数回答)。

6名のサポーター院生への聞き取りにおいて、話しかける際の工夫について聞いたところ、「勉強している時は話しかけるタイミングを考えた」2名、「3人目が会話に入りやすいようにした」2名、「(持っている飲物、相手の好きそうなことなど)小さいことから話しかける」、「2人で話している時に自分が入っていく」といったことが挙げられた。また、困ったことについて、「スペースが勉強する人ばかりの時は手持ち無沙汰になった」が2名、「特性や性格がわからないので話しかけにくかった」1名が挙げられた。今後いてほしいサポーター像は「親しみやすい人」が2名、「(勉強の話ができるよう)同学部、同学年の人」が2名、「話しかける姿勢をもてる人」、「話を聴ける人」がそれぞれ1名であった。

これらの結果から、発達障害学生への「居場所」の提供と、そこでのコミュニケーションを促進するためのピア・サポーターの配置は有効であることが示唆された。ただし、そうした居場所は、学生にとって大学生活や趣味についての「コミュニケーションの場」であると同時に「学習の場」でもあり、ピア・サポーターには学生がどちらを求めているのかを見分ける力、そして話を聴く力と同時にファシリテーターとして自分から学生に話しかける力や学生同士をつなげる力や工夫が必要であることが明らかになった。

(3) 個別学習支援の実践をとおして、ピア・サポートの支援対象学生にとっての意義は3つあると考えられる。1つは社会的障壁の軽減である。大学の授業では「授業がわからない」と「友達がいらない」は密接に関連していて、友達づくりが苦手な学生は現実には単位取得が困難になりがちである。コミュニケーションや社会性の障害がある発達障害学生にとってこれは社会的障壁であり、サポーターによる学習支援はその軽減になったと考えられる。2つめは相談スキルを学ぶ機会となることである。学習支援を受けながら単位取得をするという成功経験をとおして、「困った時は誰かに相談すればよい」という、大学卒業後も必要なスキルを体験的に学ぶことができる。3つめは、「適当にやる」という感覚を学ぶ機会となることである。とくに自閉スペクトラム症の学生は「適当にやる」のが苦手であることが多いが、彼らはサポーターから「この科目は全部やらなくてもここまでやっておけば大丈夫」と言われると、職員から言われるよりも腑に落ちるようであった。これは受講者という同じ立場であるからこそであり、ピア・サポートの利点といえる。

事例1：Aさんは小さい頃に発達障害の診断を受け、本学理系学部入学時から支援申請を行った。Aさんは、講義中に内容がわからなかったり、思いがけないことがあるとパニックを起こして教室を飛び出すことがよくあった。2年次より学期中1～2科目、同学科の同級生の学習支援を受ける。そのサポーター学生はAさんの特徴を理解し、対象科目だけではなく、実験や演習でもAさんがパニックにならないように、他の学生との橋渡しをしてくれた。Aさんも「講義がわからなくても、週に1回支援室に来れば大丈夫」と言うなど、徐々に安心して講義を受けられるようになった。6年目まで学習支援を受け、所属学科の配慮も受けて卒業した。

事例2：Bさんは3年次から精神的に不安定になり、授業に出席できなくなった。医療機関を受診し精神疾患の診断を受けたが服薬治療は拒否した。保護者とカウンセラーの説得で大学に支援申請はしたが、実際に配慮を受けることは拒否した。その後症状が悪化したため入院し、留年することになった。退院後は服薬治療を受けたこともあり授業に出席できるようになった。Bさんから「学習支援を受けたい」と希望があり、発達障害で支援認定を受けている、同学科の下級生がサポーター学生として苦手な専門科目の支援を行った。Bさんは2年間学習支援を受け、

所属学科の配慮も受けて卒業した。

学習支援はサポーターにとっても教育的効果が期待できる。サポーターには支援対象学生が求める科目について、彼らの気持ちを理解して教える力が必要である。サポーターからの事後の聞き取りでは、発達障害の学生の行動が理解できるようになったと述べたサポーターがいた。これは教科書に書いてあるような発達障害の特徴の理解という意味ではなく、支援対象学生とのコミュニケーションをとおして、周りの人間からすれば異常な行動であっても、その学生にとっては理由がある行動であることが理解できるようになったという意味であった。これは、発達・精神障害者への差別解消にとって重要な学びであると考えられる。

ピア・サポートによる居場所支援と学習支援のいずれにおいても、サポーターには一定の専門性や適性が求められること、支援対象学生とサポーターを見守る担当職員の強い関与が不可欠であることが明らかになった。ピア・サポート担当職員は、サポーターを選ぶ際には学生の希望や意志だけではなく、募集過程での適性の確認、応分の謝金などを考える必要がある。一方で、サポーターへの要求水準が高すぎると確保が困難になるとともにピア・サポートの趣旨からも逸れてくる。サポーターの専門性や適性の問題と支援対象学生のニーズとのマッチングは担当職員にとって重要な仕事であり、ピア・サポートを実施する際の課題となる。

<引用文献>

早坂浩志、他 7 名、支援経験に基づく、発達障害学生の大学生生活ストレスと支援のあり方についての検討、CAMPUS HEALTH、55 巻、2018、288

日本学生支援機構、平成 30 年度障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書、2019

高橋知音、他 4 名、ASD 関連困り感尺度の妥当性の検討：診断の有無による得点の比較、CAMPUS HEALTH、54 巻 2 号、2017、204-210

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 早坂浩志、新村暁、立原聖子、長沼敦子、茅平鈴子、阿部智子、栗澤優子、小野田敏行	4. 巻 57
2. 論文標題 発達・精神障害学生の居場所支援および学習支援におけるピア・サポートの活用	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 早坂浩志
2. 発表標題 発達・精神障害学生の「居場所」への大学院生ピアサポーターの試行的配置について
3. 学会等名 第56回全国大学保健管理研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 早坂浩志
2. 発表標題 障がい学生への合理的配慮と学生相談室
3. 学会等名 日本心理臨床学会第36回大会シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 早坂浩志
2. 発表標題 支援経験に基づく、発達障害学生の大学生活ストレスと支援のあり方についての検討
3. 学会等名 第55回全国大学保健管理研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 早坂浩志
2. 発表標題 「AS傾向」学生の学業・人間関係の悩みへの対処 - ASD関連困り感尺度を利用した質問紙調査 -
3. 学会等名 日本学生相談学会第37回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 早坂浩志
2. 発表標題 ピアサポートによる発達障害学生への個別学習支援
3. 学会等名 第57回全国大学保健管理研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 早坂浩志
2. 発表標題 発達障害学生への多職種による卒業までの支援事例 - 繰り返される劣等感の訴えに対するカウンセラーの関わりの検討 -
3. 学会等名 日本学生相談学会第38回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	立原 聖子 (Tachihara Seiko) (40613526)	岩手大学・保健管理センター・准教授 (11201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力 者	新村 暁 (Niimura Aki)		